

# 「百人一首 小倉の山踏」の俗語（訳語）について

—その助詞—峯梯・遠鏡・あゆひ抄と比較して

道井 登

## (一)はじめに

さきに、金沢大学教育学部紀要、第三五号（昭和六十年二月）に、「百人一首小倉の山踏の俗語」と題して、雅言の助詞「ぞ、こそ、かな、」、助動詞「けりけるけれ」に対しての俗語（訳語）について考察したのであるが、本研究はその続きである。前回は「小倉の山踏（以下山踏と略記する）（文化十四年）」と「古今集遠鏡（以下遠鏡と略記する）」を比較しながら訳語を検討したのであるが、今回は「百人一首峯梯（以下峯梯と略記する）」と「あゆひ抄」を加えて、比較検討し、その俗語（訳語）の特色を明らかにしたい。今回は、助詞（1）「何を何み」、（2）「1、何かは、2、何やは」、（3）「何さへ」、（4）「何だに」、の俗語（訳語）について考察する。紙数制限の爲他の助詞については割愛し、他の機会に譲りたい。

本居宣長・春庭の教えを受けた「山踏」の訳者の中津元義と「峯梯」の訳者の衣川長秋との訳語（俗語）は共通しており、師の教えを忠実に守っている。それは古今集を出目とする百人一首中の歌、

二十四首の訳語（俗語）がすべて「遠鏡」の訳語（俗語）と寸分違わないことによってもわかるのであるが、出目を古今集に拠らない歌の助詞の訳語についても、師の教えどおりである。例えば「何かも」（詠嘆）の訳語には、「何かも何」の形の場合は「何ゾ」を山踏・峯梯ともに用いており、「遠鏡」何ゾ、何ゾイ、あゆひ抄何ゾサテモ、「何かも」の形の場合は「何かナマア（山踏）」「何かイマア（峯梯）」の訳語を用いている。（遠鏡何カイ、何かイマア、あゆひ抄何カサテモ）。

山踏・峯梯の訳語は、遠鏡に拠っているが、その遠鏡とあゆひ抄は同じもしくは類似した訳語（俗語）を用いている。宣長と成章は生存中、交渉が全くなかったのであるが、助詞の酷似は、交渉があったのではないかと疑わせるほどである。上記の「何かも」の場合にも、「何かも何」の場合は遠鏡は「何ゾ、何ゾイ」、あゆひ抄は「何ゾサテモ」、また、「何かも」の場合は、遠鏡は「何かイ、何かイマア」、あゆひ抄は「何かサテモ」と場合々々によって訳語を分けて用いる点まで、あゆひ抄と遠鏡がおなじである。この助詞の訳語における類似については、以下の考察の中で明らかにしたい。

## (二) 各語の考察

(A)を「山路」、(B)を「峯梯」、(C)を「遠鏡」、(D)を「あゆひ抄」として以下示す。(数字は(A)(B)の場合は百人一首の番号を示し、(C)(D)の場合は古今集の歌番号を(古三六)示す。)

(1) 「何を何み」↓「何方何サニ」

(ア) 「苦をあらみ」↓(A)「苦ガアラサニ」、(B)「苦ガウスクアラサニ」(1)

(イ) 「風をいたみ」↓(A)「風がツヨサニ」、(B)「風ガツヨサニ」(四八)、(C)「風ノツヨサニ」(古七〇八)

(ウ) 「瀬をいたみ」↓(A)「川ノ瀬ガ早サニ」、(B)「瀬ガ早サニ」、(七七)

以上が山路・峯梯の例である。「遠鏡」の「何を何み」の例は十四例ある。その訳語に「何方何サニ」(「夜を寒み」↓「夜ガ寒サニ」)を用いているもの、(三三・六九四・八九一・六六五・二二一・四一六・七八一・四九七・二二八)の九例があり、「何ノ何サニ」(「夜を寒み」↓「夜ノ寒サニ」)を用いているもの、(七〇八・六六三)の二例がある。この外に「夢をはかなみ」↓「夢ノヨウデアマリハカナサニ」(古六六四)がある。あゆひ抄は「何何み」、「何を何み」の訳語「何が何サニ」と訳語している。

「何を何み」の訳語「何方何サニ」は山路、峯梯、遠鏡、あゆひ抄ともに同じである。

(2) 1 「何かは」↓「何ゾ」「何ゾイ」、「何カ」「何カイ」

2 「何やは」↓「何ゾイ」、「何カイ」「何ヨイニ」「何ヂヤワイノ」

一般に疑問・反語と言われている助詞である。あゆひ抄で「心を反へして落着する言葉なり。」と説明されているものである。

(ア) 「いかに久しき物とかはしる」↓(A)「ドノヤウニ久シイ物ヂャト思シ召ソ」、(五三三)(B)「ドレホドヒサシイ物ヂャト思召マスゾイ」、(五三三)

百人一首ではこの一例のみである。あゆひ抄に「何かは何」…里「カは」を回して、下の何の下に「ゾイノ」と付くべし」と説明されているものである。また、「何は何かは」と重ね言葉に詠み、さらでも近く「は」を受けたるをば心得て「トイフモノカイノ」と里すべし」という訳語を付ける場合をも説明している。これを遠鏡で見ると、

(イ) 「たれかは春を恨みはてたる」(古一〇二)↓(C)「…トント見カギツタ者ガアルゾ」、(D)「誰かは春を恨み果てたる」

この「何かは何」↓「何ゾ、何ゾイノ」の例は、遠鏡では(古一〇一・九七九・四四九・四六四)の四例がある。

(ウ) 「いとせに二たびとだにくべき春かは」(古一一一)↓(C)「…二度トモクル春カイ」、(D)「…ひと年に再びとだに來べき春かは」

この「何かは」↓「何カイ、何カイノ」の例は(古九五・一一二・一三一・五四九・七〇一・七四三)の六例がある。この外に

(ア) 「年に一たびあふはあふかは」(古一七八)↓(C)「一年ニタッタ一度グラキアウノガアウノカソレヤアウト言モノデハナイ」

(ウ) 「立つことやすき花の陰かは」(古一三四)↓(C)「花の下

ハ立ッテイヌルノガ何ントモナイカサア ソレデサヘ花ノ  
下ハ立チサリトモナイニ……」

(ウ) 「……われひとりかは」(古一〇五三) ↓(C) 「……オレヒ  
トリカ オレバカリチャナイ皆サウチャ」

である。山踏・峯梯・遠鏡の訳語は少しの違いはあってもほとんど  
があゆひ抄の説明の通りになっている。山踏の「ゾ」、峯梯の「ゾ  
イ」は、遠鏡の「ゾ、ゾイ」に拠っていると考えられる。遠鏡とあ  
ゆひ抄も、「何かは何」の場合は、「ゾ、ゾイ」(遠鏡)「ゾイノ」  
(あゆひ抄)と訳語し、「何かは」の場合は「カイ、カ、カサア」  
(遠鏡)、「カイノ」(あゆひ抄)と訳語するなど基本的に同じである。  
宣長と成章の理解の仕方が全く同じであつたのであろうか。それと  
も、あゆひ抄の影響が遠鏡の訳語付けに及んでいた結果なのであろ  
うか。

「かは」とほぼ同意の「やは」の場合を見ると、まずあゆひ抄に  
は、「何やは」……里「カヤ」と言ふ。心反へりて落着する事「か  
は」に似て、彼はおしなべたる理によりて静かに、これは目のあた  
りの勢によりて表をおさふるを、たがへりとす。これ「か」と「や」  
のたがひめなり。この言葉もとより受け様も同じからず略「何  
やは何」第一「さす中のやは」といふ。……心得おほかた前の「中  
のや」の下に詳しくいふがごとし。多くは「やは」を「ハ」と里し  
て、下何に「カヤ」「カイヤイ」など付くべし。略第二「ささ  
ぬ中のやは」といふ。……里「何チャヤ」と説明している。

(ウ) 「かくとだにえやはいふ……」(五一) ↓(A) 「心ノホドヲ  
カウトサヘエイハネバ」(三)コレホドニ思ヒガモユルトハエ  
シラシヤルマイ」、(B)「……心ニ思フホドノ事ヲエイハネ

バソレユエ胸ノ中デクヨクヨト……」

(ウ) 「なげけとて月やはものを思はする……」(八六) ↓(A) 「…  
…月が物思ヒハサセルカ 月ハ物思ヒヲサセルモノデハナ  
イニ……」、(B)「……月が物思ヒヲサセルカイ、ソウデハ  
ナイ……」

(ウ) 「有馬山みななさ原風ふけばいでそよ人を忘れやはする」  
(五八) ↓「……ウシハ少モ忘レハイタサヌ其ヤウニ約束  
シタ人ヲ忘マセウカイ」、(B)「……君ヲワスレヤウカイ、  
ワスレハイタシマセヌ……」

(ウ) (ウ) (ウ)の例において、山踏・峯梯は同じ訳語を用いている。  
(ウ)の「エイハネバ」の訳しかたは遠鏡にはないが、峯梯の「エイハ  
ネハ」の傍注からして、師の教えにしたがつた訳語と考えられる。

(ウ)の例で(A)と(B)で「カ」と「カイ」の違いはあっても同意である。

「心反へりて落着する」訳語の付けかたも同じである。この「心反  
へりて落着する」訳語の付けかたでは(ウ)の例の(B)が「……ワスレヤ  
ウカイ ワスレハイタシマセヌ」とつけている。(A)は「ワスレハイ  
タシマセヌ」を省略しているが、「心反へりて落着する」反語訳の  
パターンは、遠鏡・峯梯・山踏において定形化されていたと考えら  
れる。あゆひ抄では「カヤ」「カイヤイ」の訳語を示し、「心反へ  
りて落着する」意のあることを説明しているので、あゆひ抄・遠鏡  
における「何かは」「何やは」の理解は全く同じであつたと考えら  
れる。遠鏡の例は

(ウ) 「……人のころあかれやはせぬ」(古六) ↓(C) 「人ノ心  
ニタンノウスルホドユリト咲テアツガヨイニ、ナゼニ  
イツモト同シヤウニ今年モ早クチルゾイ」

(甲) 「……梅ノ花色こそ見えねかやはかくるる」(古四一) ↓

(C) 「梅ノ花ガ暗ウデ色コソ見エネ 香ガカクレルカ、香ハ  
ナンボクラウテモ隠レハセヌ……」

(シ) 「……恋しとおもはましやは」(古六七九) ↓(C) 「……此

ヤウニ恋シトハ思モハウカイ、此ヤウニハ思フマイニ」

(ス) 「いのちやはなにぞは……」(古六一五) ↓(C) 「命ガサ何  
ダヤゾイ……」

(コ) のような「……ヨイニ、ナゼニ……」の訳語を用いたものに、

(古三九五・四六三・七〇四・七二二・九四八・一〇三五・一〇六  
七) の八例がある。(シ) のような「……カイ……」の訳語を用いたも

のに、(古一〇七・三六七・三八五・六七九・六九九・七八九・八三  
五・八三九・八四六・一〇四二) の十例がある。(コ) の「……ヨイニ、

ナゼニ……」の訳語はあゆひ抄にないが、あとの「カ、カイ、チャ」  
はあゆひ抄の「カヤ、チャヤ」の同類である。

この「やは」の反語訳のパターンは「かは」の訳語の場合も同じ  
である。例えば「空ハ恋シイ人ノ形見カイ、形見デモナンデモナイ

ニ……」(古七四三)、 「一年ニタツタ一度グラキアウノガアウノ  
カソレヤアウト言ウモノデハナイ」(古一七八)、「イツサ雪ノ

消ル時ガゴザルゾイ」略ー白山ノ雪ハ春デモイツデモキエハ致サヌ  
……」(古九七九)のごとくである。以上、反語訳をする場合、「何

かは」「何やは」の文意をとらえての訳語をし、その訳しかたに一つ  
のパターン化が示されている。

(3) 「さへ」↓「何マデ」「何マデガ」「何サへ」

「さへ」は同じ趣のものが付加したり、範囲を広げたり、ま  
た、軽いものを例示し、重大なものを予想させたりする意の

副助詞である。

(ア) 「……をしからざりし命さへながくもがな……」(五〇)

↓(A) 「……ラシウモナカッタ命サへ今デハタント長イキヲ  
シテオテイツマデモ……」、(B) 「……惜ウナカッタ命マデ

一度逢テ見タ今朝ノ心ハ……」

(イ) 「……ねやのひまさへつれなかりけり」(八五) ↓(A) 「……

人バカリね屋ノスキマサへツレナウテナンボウニモシラマ  
ヌワイ」、(B) 「……寝屋ノスキ間マデガツレナウシラマヌ

コトデゴザルワイ」

(ウ) 「……岸による波よるさへや夢の通路人めよくらむ」(一

八、古五五九) ↓(A)・(B)・(C) 「……夜ル夢ニ通フトミル道  
マデ人目ヲハバカリテヨケルヨウニミルノハドウシタコ

トチャヤラ」

(ウ) の歌は古今集を出自として百人一首にとられた歌である。山路

と峯梯は遠鏡の訳語を忠実に写し載せている。このような古今集を  
出自とした百人一首の歌は二十四首あり、遠鏡の訳語を山路と峯梯

は写し載せているのである。

(ア) と(イ) の歌の「さへ」を山路は「サへ」と訳し、峯梯は「マデ、  
マデガ」と訳語している。この「さへ」はあゆひ抄にいう「一つの

事に二つ三つも添ひたるを言ふ言葉なり。里「マデガ」「マデモ」  
など言ふ」にあたるどころの語であり、「マデ、マデガ」と訳語し

たいところである。同じ教えを受けたと思われる弟子の間で違いが  
出たものである。ところで、遠鏡では「マデ、マデガ」と訳語した

ものは、(古八二・一〇四・一二二・一二四・一四六・一九〇・一九  
一・二六三・二六八・二八〇・二九九・三〇四・三二八・三四二・

五四五・五五九・五八六・六二八・六二一・六五六・六五七・七五  
六・七六六・七八二・八五四・九六〇・一〇七八」の二十七例がある。  
「サへ」と訳語したものには八一三・一〇二七・の二例がある。

(エ) 「我さへにしづ心なし」(古八二) ↓(C) 「……コチマデガ心  
ガザワザワトシテオチツカヌ」

(オ) 「おのれさへ我をほしいと……」(古一〇二七) ↓(C) 「……  
汝サヘワシヲノゾンデ逢ヒタイトイフ」

(カ) 「わびつる時さへもののかなしきは……」(古八一三) ↓(C)  
「此ヤウニ恋ニアグミハテタ時節サヘ其人ヲヤツハリイト  
シイと思ウテ……」

(ケ) の「サへ」は「オ前マデガ私ヲ妻ニホシイ……」の意であり、  
(ク) の「サへ」は「ツラク思ツテイル時サエ……」と訳語すべきところ  
で、「マデ」「サへ」の訳語の使い分けに違いが見られるのである。  
この他、あゆひ抄と遠鏡でちがった訳語がつけられているものに  
(古二八二)の歌がある。

(キ) 「……ははそのもみちちりぬべみよるさへみよとてらす月影」  
(二八二) ↓(C) 「……モミチガオツツケ散ラウヤウニ見エルニヨツ  
テ昼バカリデナシニ夜ルモ人ニ見ヨトテ……」(D) 「……夜さへ見  
よと……」

この「さへ」は「昼タケデナク夜マデモ」の意であるが、訳語は  
違つても、遠鏡とあゆひ抄の理解の仕方は同じである。

以上「さへ」の訳語の付けかたに、山踏と峯梯、遠鏡とあゆひ抄  
とに少しの違いのあるものもあるが、意味の理解の仕方は同じであ  
り違いはみられない。

(4) 「何だに」 ↓「サへ」「ナリトモ」

「何だに」は意味の軽いものをあげ、言外に重いものを類推させ  
る意をもつ助詞である。あゆひ抄には「その一つを言ひ明らかに残  
りを思はせたる言葉なり。里「サへ」「ナリトモ」「デモ」互に当  
たれり。このうちに「不倫」を受けたる時、また二つの事をたくら  
べて言ふなる時は「サへ」と言ふがよく当たれり。この心を里にも  
「ダニ」と言ふ人あり。また、詠(あつらへ)・禁(いさめ)・願  
(ねがひ)の心あるをば、「ナリトモ」と当てて心得べし。そのほ  
か「デモ」と当つべき心多く見ゆ」とある。

(ア) 「かくとだにえやはいふ……」(五一) ↓「心ノホドラカ  
ウトサヘイハネバ……」(B) 「カウカウヂヤトサヘクハシ  
ウイヘバヨケレド……」

(イ) 「恨みわびほさぬ袖だにあるものを……」(六五) ↓(A)  
「……キツウ難義ニ思テ泪ニ袖ノカハク隙モナウテ朽サヘ  
アルノニ……」(B) 「……恨ミノ涙ニ袖ガヌレドホシニヌ  
レテクチルガソノ袖ノクチルサヘツライニ……」

(ウ) 「……雄島の蟹の袖だにも濡れにぞ濡れし……」(九〇)  
↓(A) 「……ヲシマノアmano袖デサヘモヌレニヌレテ……」  
(B) 「雄島ノ海士ノヌレテアル袖サヘモヌレテアルバカリデ  
サ……」

山踏と峯梯の「だに」の理解と訳語の付けかたは同じである。「軽  
いものをあげ、言行に重いものを類推させる」もので、「サエ」の  
訳語に当たる歌である。百人一首はこの三首のみである。遠鏡の「だ  
に」については次ぎのごとくである。

(エ) 「……松の雪だにきえななく……」(古一八) ↓(C) 「……雪  
サヘマダキエズニアッテ……」(D) 「……松の雪だにきえななく……」

この「サエ」と訳語したものには、(古八六・一三四・一六七・三八七・四四九・四六六・五〇二・五三三・六七六・七五九・七六七・八三九・八五八・九四五・一〇二八)の十五例がある。この中の(一六七)の「ちりをだにするじ……」を遠鏡は「花ガサイテカラハ塵サヘカケマイトサ」と訳語を付けたのに対し、あゆひ抄では「塵をだにするじ……」と「デモ」の訳語をつけてこの歌は「願はしからぬ事をあらましてよめる脚結なれば『デモ』に当たれり」と説いている。「ナリトモ」と訳語したものは(古一〇、四八・六一・七九・九一・一〇六・一三一・二四二・三三五・七一七・八一〇・八一・八二七・八三一・八四七・九一四・一〇六四・一〇八四)の十八例がある。例えば

(付) 「……香をだにはへ……」(古三三五) ↓ (C) 「……セメテ香ナリトモハツキリシレルヤウニニホへ……」

のごとくである。この十八例のうち「セメテ……ナリトモ」の形の訳語をつけているものは、(古四八・六一・七九・九一・一三一・二四二・三三五・七一七・八一〇・八三一・八四七・一〇六四)の十二例がある。この他に

(カ) 「山しろの淀のわかごもかりにだにこぬ人……」(古七五九) ↓ (C) 「セメテカリソメニチツトサへ来テクレヌ人ヲ……」

(キ) 「……音にだに人のしるべく……」(古六六四) ↓ (C) 「……音ニモ人ノシルヤウナフリヲセウカマア」、(D) 「……音にだに人の知るべく……」

(ク) 「……夢にだに見ゆ……」(古六八一) ↓ (C) 「ワシヤモウ思フ人ノ夢ニモ見ゆ見エルト……」

の例がある。あゆひ抄の「デモ」と訳語されるところのである。「だに」の訳語「サヘ」「セメテ……ナリトモ」「デモ」ノ付けたにおいて、山踏と峯梯、遠鏡とあゆひ抄で少し違いのあるものもあるが、大方は同じである。

紙数の都合で大部分の助詞、助動詞について割愛しなければならぬが、助詞に関する限り、あゆひ抄と遠鏡、遠鏡と山踏、峯梯に殆ど差異はない。山踏と峯梯は師の教えに従って理解し、訳語付けをしている。そして当時の読者の理解を助け、教化をはかっている。現在の訳語に通じているところから考えると成章、宣長を頂点とした訳語(俗語)の普及が弟子たちなどによってなされたものと考えられる。そして、この俗語(訳語)が、江戸時代後期の口語(俗語)文章体をつくったとも言えるのではないか。さらに、仮説を述べれば、富士谷成章と本居宣長の二人に全くの交渉がなかったにしても、以上の助詞の訳語の特色、類似性から見て、影響が互いにあったのでなからうか。ご教示をお願いしたい。(使用図書「百人一首峯梯」は和泉書院の影印、「百人一首小倉の山踏」は能登宇出津の加藤吉彦の写本、「あゆひ抄」は勉強社文庫の影印、「遠鏡」宣長全集―筑摩書房)

(石川県立金沢桜丘高校教諭)